



特報 麻布のアメリカ

- 1 カフェテリア
- 2 求人は多岐にわたる
- 3 学生用のラウンジ
- 4 明るい教務部
- 5 総合案内にはグッズ売り場も併設
- 6 就職相談窓口はオープンな雰囲気。企業でのインターンシップが単位として組み込める学科もある。
- 7 5万冊の蔵書と800種の雑誌。アメリカ本校の蔵書にもアクセス可。
- 8 当然可書も外国人
- 9 本のセール
- 10 アート学科もある
- 11 日本語はない。
- 12 社員の職員室。オープンだ。
- 13 エーと、英語で燃えないごみはなんて言っつけ
- 14 国際電話カードは必需品



テンプル大学

多くの大使館がある麻布。各国の料理店があり、インターナショナルな食材をそろえたスーパーや世界に名だたるブランド店は、東京いや日本中からの羨望を集めている。昔も今も麻布は日本を代表する国際的でおしゃれな街だ。だが麻布を語るには、これらのきらびやかな面を紹介するだけでは充分ではない。今回はこの麻布に存在する本物のアメリカの大学、テンプル大学ジャパンキャンパスを訪れた。

そもそも外国大学の日本校として文部科学省に認められたものは、このアメリカの大学が指定されるまでの2005年以前はなく、学部から大学院課程まで日本で修了できるのは現在もテンプル大学が唯一の存在である。つまり日本にいながらにしてアメリカの本校と同じ学位を取得でき、さらに日本の大学院に進学することも認められるということだ。

南麻布の一角にあるキャンパスは土地柄、ビルディングの中にある。昼時ともなればさまざまな国の学生たちが校内を行き交い、一瞬ここが日本であることを忘れてしまう。見廻すとすべての掲示や表示も英語である。ここではすべてがアメリカンスタイルで教育が行われているが、学生たちのかもし出すフレンドリーな雰囲気はたしかに「外国」であり、それは一階受付の色彩から机の配置まで及んでいる。これなら日本にいながらにして留学している感覚が体験できる。だがそれだけでは意味はない。重要なのは何を身につけられるかだ。

アメリカンスタイルは雰囲気や英語という単なる語学だけでなく、学問に対するアプローチや表現方法といった基本的な思考方法の基礎に影響を及ぼす。それは多かれ少なかれ日本の教育にその欠如が言われてきた創造性と論理性そしてとくに積極性を養うだろう。それを証明して卒業生の就職先は外資系が多く国際的だ。またふつう入試の際決めなければならない日本の大学と違い、専攻(メジャー)は2年以内に決めればよい。本当に学びたい分野を探るのに余裕があるのも利点である。これは自ずから真剣な勉学を促す。

今日本はグローバリゼーションの流れの真只中にあり戦後構築してきたシステムが多かれ少なかれ問直されている。その流れの中で、教育という基本的なところで国際化が静かに確実に進展している場所がここ麻布なのだ。

テンプル大学は積極的に市民に開かれており、本年も5-6月、港区在住在勤者に対し外国人教授による「区民大学」(公開講座)が予定されている。港区の広報に告知されるので参加されてはいかがだろう。

(文/高橋 光)



14

麻布びと

俳優座のある街

「子どもの求めているのは純粋な俳優術である」千田是也

「じゃあ俳優座の前で・・・」何度六本木交差点の俳優座の前で待ち合わせをしたことだろう。思えば俳優座劇場はまるで東京タワーのようにそこにあり、不慣れを詫げるタクシーの運転手さんも「俳優座」と言えばびたりと前につけてくれたものだ。六本木を語るに不可欠なこの俳優座は日本を代表する新劇の本拠地。1975年に入団した山崎菊雄さんは制作ひと筋33年、俳優座から六本木の街を見続けて来た人だ。

山崎さんが入団した1975年(昭和50年)頃は都内に小劇場が増えてきた時代。そういった時代の変遷と旧俳優座劇場の老朽化という問題もあり、1980年(昭和55年)2年間の改築後、現在の劇場にリニューアルオープンをする。

ここは基本的に300(席)なんです。当然ですが席数が多いほうが売上げはいい。当時ここを売って400(席)くらい劇場が欲しいという意見も出ました。しかしどうも千田先生たちは“ここ”にこだわると…。やはり青春の場所なんですか。舞台の息吹とかまなざしとかを観客が感じ取れるのは千人入の大劇場では無理じゃないですか。彼らは経済的なことももちろん考えていましたが、それ以上により良い空間で演劇を観客と共有したいんだというのがひじょうに強かったような気がしますねえ。70年頃から80年に掛けていわゆる小劇場(註4)の活躍が目立った時代でしたね。実は3年前初めて佐藤信さん(註5)にうちの「春、忍び難きを」という芝居を演出していただきました。外部の演出家、特に黒テントという小劇場の旗手ということで正直少し抵抗はあったんです。だけどもう40年も経っているわけですから…。元々は同じDNAが流れていると思うん

です。斎藤憐さん(註6)作です。彼はこれで紀伊国屋演劇賞と鶴屋南北戯曲賞を受賞しました。…うん、やってよかったですね。個人的には4年前の「足摺岬」という芝居への思いが強いです。田宮虎彦さん原作の小説で、挫折した主人公の青年を取り巻く田舎の人々の優しさに忘れてしまった日本人の良さを感じて使命感というか、夢中で企画から取り組んだ作品です。古い作品ですし、なぜ今?という反応もありましたが、しかし結果は評判もよく、今そういう優しさが求められているんじゃないですか。主演のベテラン俳優浜田寅彦さん(註7)が84歳でこの老運路朴沢健二郎役で紀伊国屋演劇賞個人賞を受賞されたのが嬉しかったですねえ。絶品の演技でした。

千田先生が亡くなってもう14年になります。しっかりしなくちゃいけないとは思いますが、薫陶を受けた方たちが現役で頑張っているから次の世代にしっかり継承出来ると思いますよ。来年俳優座は65周年。ここで立ち返って来年は新劇をやらうと提案したんです。温故知新というか、やはり我々は新劇育ちなんですから…。

六本木の街も美術館の完成が続いたり最近では芸術の街としてのイメージが強くなってきていますね。私たちが今までは井の中の蛙というか(笑)…これからもっと地元の方たちと積極的に交流して外に出ようと思っているんです。

5階の稽古場を撮影させてもらおうと、若い美男美女の集団がよく通る耳に心地良い声で美しい台詞を発している。これが王道、演劇のエリート集団だ。3月16日開催の六本木ふれあい祭りで若い女優さんがアルゼンチンタンゴを歌うとか…。なんてぜいたくな祭りだろう。やっぱり麻布は宝の山だ。

卒業して一度一般企業に就職したんですけど、なんとなく水が合わなかったというか…そんな時たまたま俳優座の募集記事を見て応募しました。当時は創立メンバーの千田先生(註1)、東野英治郎さん(註2)と錚々たるメンバーがお元気でいらっしゃいましたからね、嬉しかったですよ。そういう面では第一世代がいたというのは大きいですね。俳優はいい俳優になってもらうために演出家に絞られますが、私は制作で入ったのでなんとなく可愛がっていただいで…。先輩達と毎日近くの安い居酒屋に飲みに行っているとお話を聞かせていただいたり、俳優の中谷一郎さん(註3)には本当によく連れて行ってもらいました…。お金はなかったけど楽しかったですよ。面接の時に演出家の先生に「最高の給料払うから…」と言われて「ああ、すごいなあ」。そしたら前の給料の2分の1(笑)。しんどかったですけど、スタッフもキャストもみんな夢に向かっていきいきしていましたねえ。古い劇場ではね、2階の売店でおつまみ寿司を売っていたんですよ。売れ残るともらえるのが楽しみでね、売れないで欲しいなあ(笑)…。あのおいなりさんの味は鮮明に覚えていますね。

1949年(昭和24年)専用稽古場「俳優座六本木スタジオ」の前。中央の男性が千田是也氏。右が妻で女優の岸輝子氏。



旧俳優座劇場

俳優座の結成は1944年(昭和19年)2月10日。戦争の終焉を人々が感じ始めていたとはいえ、まだまだ統制の厳しい戦時下である。メンバーは青山杉作、千田是也、遠藤慎吾、東野英治郎、小沢栄太郎、東山千栄子、岸輝子、田村秋子、村瀬幸子、赤木蘭子の10名、また戦後間もない1947年(昭和22年)には松竹映画「松井須磨子の恋」への全員出演、そしてその出演料を建設基金として当時の三河台町、現六本木4丁目現在の劇場の地に待望の専用稽古場「俳優座六本木スタジオ」を建て、1954年(昭和29年)4月20日にはついに俳優座劇場を建設するのである。



今年も再演予定の「足摺岬」と「春、忍び難きを」のパンフレット。



5階稽古場で稽古中。ここに100席設けて公演することもある。

やはり戦争がまもなく終わるだろうと思ったのでしょうか。新劇は海外の翻訳劇が多く戦時中は検閲もあり、制約もあり、解散に追い込まれるということも少なくなかった。戦争が終わったら自由な演劇活動を早くやりたいと…。そういう思いの結果が戦時下の結成だと思います。彼らをすごいと思うのは、プロの俳優の養成機関として養成所を作った。そして現代作家の育成として創作劇研究会というもの作り…そこには三島由紀夫さんもいらしてね。そして最後に自前の劇場を建てた。この三本柱というのはすごいことだと思います。創立メンバーを中心にそれから入ってきた若手などは劇場を建設するために活動の場を映画にまで広げ大半の出演料をつぎ込んでいた。なかなか出来ることではないですよ。千田先生たちはどうしてもここを拠点にしたかったらしいですね。うーん、そう言われるとなぜ六本木だったんでしょう…(笑)。ただ麻布六本木の方たちは俳優座に対して文化演劇の拠点が街にあることに誇りを感じてくださったような気がします。



劇団俳優座 代表取締役 演劇制作部長

山崎菊雄さん



劇団俳優座の応援室の本棚には貴重な演劇関係の全集が並ぶ。

(註1) 千田是也 1904～1994俳優、演出家。1944年(昭和19年)俳優座を結成。以後俳優座養成所の開校、俳優座劇場の開校と日本現代演劇史初のシステムを作り上げ、加藤剛、栗原小巻、仲代達矢、平幹二郎など数多くの名優を世に送り出した。
(註2) 東野英治郎 1907～1994俳優。舞台のみならず時代劇「水戸黄門」の徳川光圀役はあまりにも有名。
(註3) 中谷一郎 1930～2004俳優。舞台、映画、テレビで活躍。同じく「水戸黄門」風車の弥七役で有名。
(註4) この場合小劇場を拠点とした劇団、演劇集団。実験的、前衛的な作品が多い。つかこうへい、野田秀樹、湯上尚史などが劇団を設立し活躍した。
(註5) 佐藤信 1943～ 演出家。劇団俳優座養成所から自由劇場を経て「黒色テント六八/七〇」(現在の劇団黒テント)の創設に参加。
(註6) 斎藤憐 1940～ 劇作家。俳優座養成所を卒業し、劇団自由劇場結成に参加。1980年「上海パンスキング」で岸田國士戯曲賞を受賞。
(註7) 浜田寅彦 1919～ 俳優。舞台、映画、テレビ幅広く活躍。

通称ニッカ池は、いまも毛利庭園の下に眠る。

六本木ヒルズの開発により誕生した「毛利庭園」のエリアは、歴史的に貴重な場所で、東京都の旧跡指定を受けている。庭園の一部が改変を受けながらも、20



生まれ変わった毛利池。この下に今もニッカ池が眠る。

世紀末まで残されてきた。庭園の歴史は、およそ350年前に遡る。

慶安3年(1650年)、毛利元就の孫、秀元が甲斐守となり、麻布日ヶ窪の地の上屋敷を設け、その大名屋敷の庭園として誕生する。その後、元禄15年(1702年)、吉良邸討ち入り後、赤穂浪士岡島八十右衛門ら10人が毛利家に預けられ(細川、毛利、松平、水野の四家に分けて預けられる)、翌年2月に、全員がこの池で本懐を遂げた。この切腹が行われてからおよそ150年後、明治時代の陸軍大将となった乃木希典が長府藩上屋敷の侍屋敷に希次の三男として生まれ、池のほとりの大井戸で産湯をつかったという。幼年期の9年をこの日ヶ窪屋敷で過ごした。

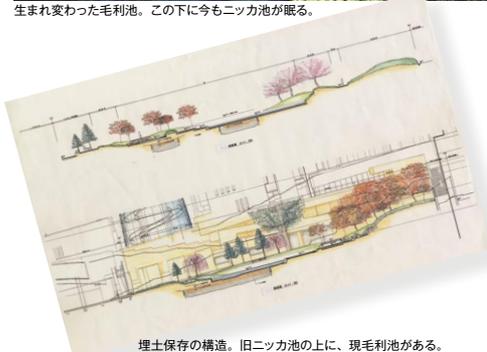
時代は変わり、明治20年(1887年)、中央大学の創始者であり、弁護士、法学者、英米法の大家であった増島六一郎が自邸として当地を取得。昭和27年、ニッカウキスキーがこの地を取得し、東京工場を竣工させた。

当時、この池にはじゅんさいが生え、鯉やカメ、ザリガニもいたようだ。麻布の地下水が湧いて池を形成していた。水が命のウイスキー工場があったほどに、六本木界隈の水はキレイだったのだ。その後、昭和52年にテレビ朝日が当地を取得。池の周辺を撮影に使ったり、桜の時期になると、近所の人たちに開放され、「ニッカ池」と親しまれ、たくさんの人たちににぎわった。

そして六本木ヒルズの建設中にも池は埋められることなく、現在は毛利庭園とともに、散策が楽しめる都会のオアシスとして親しまれている。「ニッカ池」は現在、毛利池の下に隠れている。将来のさらなる発掘調査などの可能性を残すため、ニッカ池の池底を固めて周辺地盤の改良を施し、防護シートで覆い、埋土保存を行った。数々の日本の歴史を目撃してきた六本木の池「ニッカ池」は、現代の日本社会を見守るかのように、毛利庭園の下で眠っている。

(取材・文/尾崎恭彦)

開発前のニッカ池。お花見などで住民に開放されていた。



埋土保存の構造。旧ニッカ池の上に、現毛利池がある。



火造り一火と鉄と鋳

火がマグマのように息づく鑪(ふいご)の前で、内田さんが槌(かなづち)でリズムを取り、真っ赤に焼けた鉄をたたいていた。名刺に「火造り」と書いている。

鉄のシャンデリア、オブジェ、ローソク立、照明器具、アイアンカーテンと言われる窓の鉄面格子、飾りのついた手すり、門扉等がビルの表面のガラス越しに見える建物が、外苑西通りの西麻布福祉会館のそばにある。その裏手に、「火造り」内田工場 内田一夫さんの仕事場がある。現当主の内田さんが生まれたときには西麻布に工房を構えており、長



かなづち

ここに技あり!



男だから否応なくあとを継ぎましたと優しく答えてくださり、弟さんも「鍛冶増」を名乗っている。

昔から、鍛冶屋と言えば、刀鍛冶が有名で、あとは村の鍛冶屋さんで鎌(かま)やくわ等農業用の物を造り、時代によって家の飾り金具、和錠などを造っていた。内田工場の創業は、大正時代に赤坂でお祖父さんが鍛冶屋を始めた。

「日本の近代建築」(藤森照信著)によれば、明治時代後期から大正時代にかけて、お雇い外国人の建築家、コンドル邸を初めとして、壁面に柱や梁が見えるチューダ様式なるイギリス風西洋建築が流行した。内部に暖炉などがあったようで、写真の「火掻き棒、ほうき、塵取り、火種つかみ」など鉄製暖炉用具四品とか、窓の鉄製面格子等が洋風建築の必需品になってきた。



内田工場は、もっぱら、鍛造(たんぞう)と言う製造方法にこだわり続け、三代80年以上建物に合った建築金物などの品々を造っている。「広辞苑」で、鍛造とは、「金属を加熱し、鋳または水圧機で打ち延ばして形づくり、ねばり強さを与える作業」とある。しかし、内田さんは機械をあまり使わず鋳で打ち続けている。三代続いたプライドと技と自らの感性をその一点に込め、機械打ちでは出ない何ともいえない味わいが完成品の仕上がりに表われるようにしている。

鉄に鋼(はがね)や真鍮(しんちゅう)など異なる金属を溶け合わせるにも難しさがある。また、鉄と鉄をつなぐ場合に溶接してしまうのが盛んであるが、わざわざ手間をかけリベット打ちにしたり、別々の鉄板を接合する特殊な「わかし」という手法で、叩(たた)いて、叩いて接合するのである。更に、作品の色づけも、代々伝えられた技と自らの調合で工夫している。

今は、この鍛造の個性ある味わいを好む方々の注文に応じて、面格子、門扉、鏡の飾り、抽象的な飾りなど可能な造形にあくなき挑戦をしている。

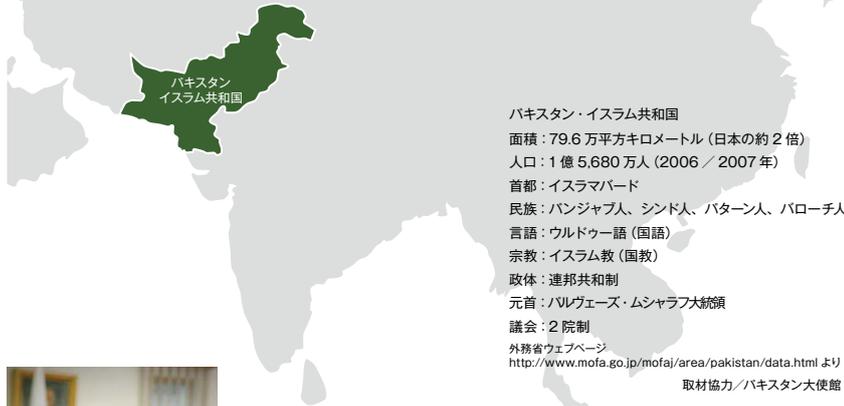
内田さんが鍛冶屋と名乗らず、火の力と自らの力と金属の力を合わせて手作業を旨(むね)とする「火造り」という言葉にこだわり続けているのは、三代続いたプライドと技のせいなのかも知らない。(取材/金子成一、森明 文/森明)



- ① 鉄製暖炉用具4品
- ② 階段手すり飾り
- ③ 窓格子の飾り
- ④ まがりを直す
- ⑤ 左・火造り
- ⑥ 右・熟る内田さん
- ⑦ 鉄のバラ飾り

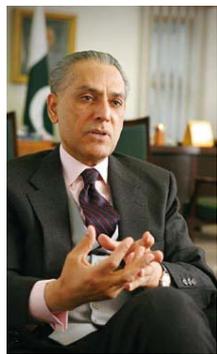
麻布の"世界"から

PAKISTAN



バキスタン
イスラム共和国

バキスタン・イスラム共和国
面積：79.6万平方キロメートル（日本の約2倍）
人口：1億5,680万人（2006 / 2007年）
首都：イスラマバード
民族：パンジャブ人、シンド人、バターン人、パローチ人
言語：ウルドゥー語（国語）
宗教：イスラム教（国教）
政体：連邦共和制
元首：ハレグヴェース・ムシャラフ大統領
議会：2院制
外務省ウェブサイト
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/pakistan/data.html>より
取材協力/バキスタン大使館



いにしえから文明を育み、 歴史を刻むバキスタン

バキスタンはインド、中国、イラン、アフガニスタンに隣接し、アジアでも重要な位置にある。60年前にイギリスの植民地支配から独立し、今まさに穏健で進歩的な国家を目指し発展している。

駐日バキスタン・イスラム共和国大使館を訪ねると、大使執務室で長身の紳士、カムラン・ニアズ大使が迎えてくださった。大使の傍らに、緑と白の二色の美しいバキスタン国旗が掲げられている。多数派のイスラム教徒を示す緑と、イスラム教徒でない少数派を示す白で構成され、緑地の部分に三日月と星が描かれ、バキスタンのイスラム遺産をシンボライズしている。

バキスタンは、紀元前2000年に至る古代のインダス文明発生の地である。季節によって最北部はマイナス50℃、アラビア海に面した南部の海岸線は50℃にも達し、その気候は地方によって両極端である。北部地方には、日本に仏陀をもたらした、西洋と東洋を結ぶシルク・ロードが通っている。今のバキスタンはイスラム教共和国だが、この地方は仏教を生んだ仏教のガンダーラ文明の中心地だった。一方、南へ向えば4000年、あるいは一部の専門家によると6000年をさかのぼると言われるモヘンジョダロの遺跡がある。

バキスタンはもともと農業国だが、2007年にはGDP 7%増という過去最高の経済成長

を記録した。経済的にもBRICs（註）の次に期待される国ではと尋ねると、今後の成長も期待され、その高成長を維持するためには、インフラの整備が重要であると強調された。例えばバキスタンは最大の牛乳生産国の一つであるにもかかわらず、不適切な物流システムのために、都市部では新鮮な牛乳を手に入れるのが難しいとのことだ。英国、米国などからの投資が盛んだが、日本企業は自動車生産以外はあまり目立たないので、日本からも多くの企業進出と投資を期待してい



ますとお話いただいた。また麻布のまちについてうかがうと、とても住みやすく、特に六本木ヒルズには頻繁に行かれるとのこと。麻布十番祭りに出店しているバキスタン料理は大変評判がよく、人気の店だそうです。

実は現在の大使館は仮住まいで、緑に囲まれた南麻布の一角に新しい大使館を建設中である。今は職員もそれぞれの住まいを借りているが、新しい大使館には職員宿舎もできるので、全員麻布に来ますよと大使も嬉しそうである。大使の勧めにより、ワイド報道官が私たちを建築現場に連れて行ってくれた。大使が期待をよせられている新しい大使館の建物は、近代的なデザインでまとめられ、進歩する若く飛躍的なバキスタンという国を表現している。大使、報道官のお話とご親切を通して、豊かな歴史を育み、アジアそして世界でも重要な地位を占めるバキスタンについて、より深い知識を得ることができた。



- ① ニアズ大使は、ジェノバ、ニューデリー、ニューヨーク、ワシントンなどで要職を歴任され、現職は5年目。
- ② バキスタンの人々は甘いお菓子が大好きとのこと、お菓子と一緒にティータイムを楽しむ習慣がある。
- ③ 建設中のバキスタン大使館。もうすぐ完成予定。
- ④ 新大使館の模型。モダンな外観で、全てのバキスタン人外交官・職員の宿舎も兼ねるため、以前の建物よりかなり広くなる。

（註）ブラジル、ロシア、インド、中国を表す。



街のへえ〜!

うどんが 鯉鮓坂ご存知でしたか。

六本木5丁目の1番と2番の間に「鯉鮓坂」があります。坂上と坂下に坂名標識が立っています。その標識には『天明年間末(1788年)頃まで松屋伊兵衛という、うどん屋があったために、うどん坂と呼ぶようになった。昔の芋洗坂とまちがうことがある。』とあります。

お出かけのついでに、ご覧になってみてはいかがですか。(文/職員)



図書館へ行こうよ。

図書館は楽しい。図書館はありがたい。あんなにたくさんのいろいろな分野の書籍や、楽しくフレッシュな刺激にあふれている雑誌を自由に借りられるんですもの。

私は最近スレーさんの画集と“ここにしみるなつかしい日本の風景—近代の浮世絵師高橋松亭の世界”と、石ケンにバラのお花 etc を彫刻する“SOAP CURVINGの手芸”の絵本を借りた。

そしてどうしても私の暮し、私の人生のページに置いておきたくて同じ物を書店で取り寄せてもらった。うれしい。大切にしていこう。こういう本とのめぐり逢いもある。どうぞ本屋さんもごひいきに。



図書館のサプライズは、“リサイクル図書”『ご自由にお持ち下さい』とある。“怪傑ゾロ”多分全巻、“商法論略説”“定本トランジスタ回路の設計”凄いいね〜!! ほんとにいろんな本があるものだ。

CDコーナーにもぎわっているし。我等の“ザ・AZABU”もあるし。こんなにもたくさんのいい事がある、知性の館、楽しみの宝庫。

のんびりと、うらかな陽ざしの午後、好きな本と時をすごすのもいいですよ。

(文/湊 早苗)

Kちゃん介護ノート 1

どうしてよいか分からない……

お医者さんは丁寧に診察の上、「延命処置はどうかしますか?」

私、「延命処置はいりませんが、リハビリお願いいたします。」と、とっさに言っちゃたの。

Kちゃんが誤嚥性(ごえんせい)肺炎になったの。つまりね、ご飯を食べると、食べ物やつばがのどを通る時に、同時にどう間違うのか気管支から肺に入って、それが原因で、肺炎になっちゃってお熱が出たりするんです。年寄りに肺炎って、あぶないですって。

救急車でいった病院の先生との会話になるまでに、長〜い、長〜い介護のお話があるから、そこから話すわ。

Kちゃん、90うん才になったの。関東大震災も戦災も無事にのり越え、若いときはお産以外には寝た事のないというほど元気で、働き者だったの。80才代初めのKちゃんは、自分一人で歩けたし、特に歯もよく、食べ物と言えばお肉が大好きでよく食べていたの。でも、90代に入って身近にいる私たちは、Kちゃんが言われること事は分っていると信じ続けているんだけど、だんだん物覚えはしないし、忘れるし、反応も、耳も、歯も、足、口もくたびれたの。

歯だったら、「80 20」(はちまる に一まる)って知っている? 歯医者さんがよく言うんだけど、80才で自分の歯が20本残るように歯

を磨こうという標語で、Kちゃん、それに近いほど歯はよかったの。90才代に入ると歯も弱ってきちゃって、でも歯医者さんが工夫して上手に保存治療して頂いたんだけど、下の歯を1〜2本残して、入れ歯になってきちゃった。その後、かなり長い間上手(うま)くいていたのだけど、年を重ねると歯茎がほそり、昨年の初めに入ると、入れ歯は合わなくなったの。

近年は、Kちゃんの手足の動きがままにならず、おしも心配で、直ぐに歯医者さんにも行けず、まあ、上の入れ歯をうまく入れていたのだけれど、下の歯がはずれて飲みこみそうになったので、危険だと思って、下は入れたり、はずしたりしていたの。歯医者さんにも行けないから(後で、ケア・マネージャーさんが色々調べて訪問してくれる歯医者さんを教えてくれたの)、どうしたらよいのが困っちゃったのよ。そうこうしていると、Kちゃんは、だんだんむせる様になり、むせる回数が増え、むせているうちはまだ良かったんだけど、次第に、苦しうだから入れ歯も入れてない回数が増えたの。そしたら、舌や喉(のど)の周りの筋肉が弱ってきちゃって、私たちと同じご飯とおかずを食べるのが大変になってきちゃったの。とにかく、歯は大切だわ……

ご飯が食べられないなんて、どうしたらいいのよって…、困ったわね…!

目の前が真っ暗になっちゃった。なにせ、介護って初めての体験で、どうしたらよいのが分からない事がいつも多いし、だから、結構思っているより辛いよ。

でも、ここが限界って思ったらそこまでになっちゃう様で怖い。

食べものが口から食べられないって…、そのとき…お医者さんが教えてくださったけど、命(いのち)って喉(のど)にもあるのを知ったわね。でも、どうしたらいいのよって思っ、「どうするの?」っていろんな人に聞いたの。そうしたら、偶然ミキサー食があるのを知ったので、ピーンときたわ。私たちと同じご飯とおかずをミキサーにかけて、それを口に運んであげれば良いんだって…難(むずか)しく言うのと嚥下(えんげ)困難食(1から5まで段階があるそうよ)というの。さらに、お医者さんもそれを補うカロリーのある液体飲料を処方してくれたの。

嬉しかったわね、ひとつ限界を超えたって…。Kちゃんと一緒に暮らせるし、お世話も、生活も一緒なんて…

介護は一人でどうしよう、どうしようと考えていないで、いろんな人に相談してみるものよって、その時、気がついたの。ありがとう。

(M)

あなたの声聞かせてください。

麻布の情報を募集しています



『ザ・AZABU』では、港区麻布地域に暮らす方々に向けて、楽しく心が豊かになる情報をお伝えしていきます。より魅力的な紙面にするために、読者のみなさんのご意見・ご感想などを募集いたします。

- いま、最も関心のあること(港区麻布地域での出来事など)
- 今後、紙面で取り上げてほしい話題、ご意見、ご質問
- 麻布地域で風光明媚な場所(写真に撮りたくなる美しい景観)……など、どしどしお寄せください。

電話、ファックス、郵送で受け付けています。宛先は、紙面表紙(題字横)をご覧ください。情報等をお寄せいただいた方には、記念品(旧町名記載のオリジナル手ぬぐい)を差し上げます。お待ちしております。



麻布の軌跡 62年前の極秘会合



昭和21年、終戦の翌年に日本の国の基本となる日本国憲法にまつわる歴史の扉のひとつが、麻布にあった旧外務大臣公邸で開かれた。当時の日米の記録はその瞬間をなまなましく書きとめている。

外務大臣 吉田 茂と日本国憲法草案

昭和21年2月13日、午前10時過ぎ、緊張感に包まれて、外務大臣 吉田 茂の顔はショックと懸念でひきしまり、間をおき、一心に相手方をじっと見つめたり、ゆっくり手のひらをズボンにそって前後に動かしながら、しばらく話を聞き、総理大臣と内閣に相談した後にお目にかかりたいと言い、この事をご内密にして頂きたいと、ふたことを話して会合を終えた。(註1)

日本国憲法草案にかかわる極秘会合の場所は、市兵衛町、外務大臣公邸で、立春を過ぎたばかりの太陽が庭に暖かく、光を背にしたGHQ(総司令部)民生局ホイットニー局長、ケーディス次長、ラウエル局員、ハッシー局員が座り、吉田 茂外務大臣、憲法問題調査委員会委員長松本丞治國務大臣、白州次郎終戦連絡事務局参与、通訳に長谷川元吉外務省職員の名が向かい合った。その時、自由と民主主義のための日本国憲法草案のコピーを吉田氏、松本氏、長谷川氏、白州氏に手渡したとケーディス次長らの報告書に記録がある。(註2) 吉田回想録に、当日「日本政府から提出した憲法改正案は、総司令部にとっては受け容れられない、そこで総司令部でモデルの案を作った。これを渡すから、その案に基いた日本案を至急起草してもらいたい」とホイットニー局長が言ったと書かれている。(註3)

前年、昭和20年4月、敗戦必至として平和の道をさぐっていた元駐英大使 吉田茂は、憲兵隊に40日監禁され後、8月15日の終戦を大磯でむかえたが(註4)、同年9月には東久邇宮(ひがしくにのみや)内閣の外務大臣になり、10月に幣原(しではら)喜重郎内閣の同職に再任された。(註5)

難問山積の終戦処理、この国のあり方や方向を決めなければならない重責を担う舞台に躍り出た。しかし、その取り組みは連合国最高司令官マッカーサー元帥をはじめとするGHQのメンバー等と典

型的な外交を繰り広げると言うより、吉田 茂一流の機知に富んだ才覚(註6)で展望を見出していった様である。どんな時もプライドを持ち、マッカーサーが吉田に葉巻をすすめたとき、「そいつはマニラ産でしょう。私はハバナのもの以外は吸いません」と断ったという逸話もある。(註7) 当時の吉田の信条は、戦に負けたら悪あがきせず、負けつづりを立派にしろで(註8)、真意は「大局的に協力し、日本の国情に合わない事があれば身を挺して堂々と争い、押し切られたら同調するが、機会を見て後日修正すれば良い」であった。(註9)

その後、日本国憲法は議会で審議され、昭和21年11月3日公布、昭和22年5月3日施行された。

市兵衛町 旧外務大臣公邸

この時の外務大臣公邸は現在の六本木一丁目8番地にあり、当時の政府が(財)原田積善会から借り上げたもので、大きな2階建て、瓦屋根の伝統的日本家屋で、戦時の爆撃を受けて玄関の壁がなく(註10)、応接間をはじめ幾つかの部屋と、たたみ4枚とお仏壇の仏間もあつた。お仏壇を撤去し黒縁にお仏壇特有の金色の飾りの残った部屋に、ベットをピッチリいれ、外相は寝泊りに利用していた。(註11)

そして、公邸の屋下に赤く焼けた我善坊町を見渡しながら、狭くて細長い崖の上の庭を、早朝や眠れぬ夜に行ったりきたり歩き回って、吉田外相は「見てごらん、いまに立ち直るよ。かならず日本人は立ち直る」をくりかえし言っていた。(註12)

日本国憲法草案にまつわるこの歴史的会合の場所を後世に語り継ぐがために、後に同所を入手した八木通商(株)は平成13年6月アーク八木ヒルズ新築に際し、当時の八木通商(株)専務取締役窪田太陽氏が(財)原田積善会と合議の上起草し、記念碑に昭和21年2月13日の事が書き留められている。



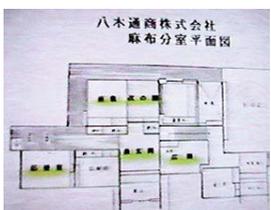
外務大臣公邸外観
提供：八木通商(株) 画像製作：港区教育委員会



仏間
提供：八木通商(株) 画像製作：港区教育委員会



仏間金飾り
提供：八木通商(株)



平面図
提供：八木通商(株) 画像製作：港区教育委員会

現在の旧市兵衛町付近



港区近代沿革図集 昭和16年 市兵衛町



記念碑「日本国憲法草案審議の地」

- (註1) 高柳賢三・大友一郎・田中英夫編「日本国憲法制定の過程」 原文と翻訳 p323 - 335 (有斐閣)
- (註2) 高柳賢三・大友一郎・田中英夫編「前掲書」p322 - 323
- (註3) 吉田 茂著「回想十年 第2巻」p25 (新潮社)
- (註4) 半藤一利著「日本のいちばん長い日」p84 - 85 (文春新書)
- (註5) 外務省・(財)吉田 茂国際基金共催「吉田 茂展」p31
- (註6) 加瀬俊一著「あの時「昭和」が変わった」p107 - 132 (光文社)
- (註7) 麻生和子著「父 吉田 茂」p32 (光文社)
- (註8) 吉田 茂・吉田健一著「大磯随想」p298 - 299 (東京白川書院) 吉田 茂著「回想十年 第1巻」p116 - 117 (新潮社)
- (註9) 加瀬俊一著「前掲書」p122 - 123
- (註10) 麻生和子「前掲書」p16
- (註11) 麻生和子「前掲書」p16
- (註12) 麻生和子「前掲書」p21

執筆に際し、八木通商(株)相談役 窪田太陽氏に御協力頂き感謝いたします。

(取材/西野さつき、森明文/森明 タイトル/高橋 光)

お詫びと訂正：前号参考文献 松浪秀子さんは松浪秀子さんに訂正します。

街ウォッチャー「六本木交差点でパシャ!」

パシャ



あぜさんとけいごさん
美術系の学校と一緒に油絵を勉強中。今日は美術館でロートレックの展覧会を見て交差点そばの喫茶店でケーキを食べました。

今回の街ウォッチャーは、仕事帰りのビジネスマンや春休み中の学生が行き交う夕方の交差点近くで撮影を敢行。昼と夜では違う顔を見せる六本木の街ですが、書店で本を選んだり化粧品を買ったり、友人同士で食事したり、上司と部下で飲みに行ったり、思い思いの時間を過ごしている皆さんに登場してもらいました。

パシャ



オーストラリアのTVクルーとケビン・ギブソンさん
番組制作のため1週間東京に滞在中。これから撮影ということで、日本在住のケビンさん(外資系人材会社の社長)が機材を抱えた皆さんを案内。



Niels HølgersonさんとPeter Hølgersonさん
Nielsさんは日本在住。今日はスイスから来たお母さんと弟さんと築地、明治神宮を観光。お母さんは横で2人を見守ってました。

パシャ

パシャ



ウイットリー-嘉子さんとアレキサンダーくん
ご近所にお住まいの親子。アレキサンダー君(カワイイ!)は11歳。生活用品を買いに来ました。コートと帽子がキマってますね。

パシャ

平野智久さんと北原佳奈さん
いとご同士。受験で上京した佳奈さんを平野さんが連れてきました。佳奈さんは翌日入試とのこと。春が来ているといいな〜と撮影スタッフも祈ってます。



パシャ



さんまさん(男性)と大福さん(女性)
上京する大福さんのお母さんが大好きなパンを買いました。「フルーツケーキもおいしいです」と赤い袋を見せてニコニコ。

いかがでしたか?北風吹きささぶ寒い日でしたが(本紙が出る時期はもう春になっていますね)ご協力いただいた皆さんありがとうございました!掲載できませんでしたが、カメラの前を様々な国の方が通って「どこから来たのか?」とスタッフも声をかけたくて興味津々。さすが多国籍の街です。

(取材/伊東みゆき、西野さつき 文/西野さつき)

Living in AZABU

“幸せな春に”

春は梅一輪からはじまり (by 服部嵐雪)
桜、桜、桜。
そめい吉野と、はかなげにゆれるあまりに美しいだけ桜。
雨が降っても、風が吹いても、お花の具合が心配で仕方ない。
あちこちにヒビキの桜があって、いつも渡る橋のたもとに咲いている、白い桜もそうだ。
ことしもきれいに咲いてくれてありがとう——と。
そして!!あのゴウカけんらんの八重桜が花開く!!
こんなにもゴージャスで美しくていいのと、言いたくなるくらい。
そして葉桜になった並木道の下を歩くと、ウフフフ、桜もちの香りがする!!
桜が一段落すると街中はなみずきがさわやかに。春のお花めぐりは忙しい。
——で食卓も春らしく。
スナッペンどうをサツとゆで、真中からさいて可愛いお豆を見せて
大根を桜のお花のカッターで抜いて、クランベリーでPinkに染めて
いつものサラダにパッパッと散らすと春らしい。
塩漬けの桜のお花や葉っぱもお料理にいろいろ使って、春・春・春のテーブルに。
お洋服もパステルカラーのものが着たくなくて
お友達のメルルさんから頂いた大判のシルクのスカーフも
春風になびかせて——なんて。



2008年、すてきな春になりますように。

(イラストレーション・文/湊 早苗)

